

メッセージアウトライン 創世記29:1～30「井戸での出会い」

[1] 「ヤコブは旅を続けて東の人々の国へ行った」

兄エサウの怒りから逃れるため、妻をめとるためとの名目でヤコブは父イサクと母リベカのもとを離れ、メソポタミアのパダン・アラムに向かった。「東の人々の国」これはヤコブが住んでいたカナン之地から見て北東のメソポタミアのこと。

[2-3] 「野に井戸があった」アブラハムのしもべがリベカと出会ったのも井戸であったが(24章)、この井戸は別の井戸であったと考えられる。井戸のふたとなっている石をはずすと、その縁から直接羊が水を飲めるような構造だったらしい。8節にあるように、群れを全部集めてから水を飲ませるのは貴重な共有財産としての水を公平に分配するための方法だったのであろう。したがって井戸の不正利用を防ぐために大きな石でふたをしてあったのであろう。「三つの群れ」それぞれ所有者が異なる。

[4-5] ヤコブは羊飼いたちに「兄弟たちよ、あなたがたはどこの方ですか」と尋ねる。ヤコブは自分のいる位置はよく知らなかったかもしれないが、母リベカの国に来たということはよくわかっていたであろう。それで自分の同族の人々であるかもしれないとの思いを込めて「兄弟たちよ」と呼びかけたのである。すると彼らは「私たちはハランの者です」と答えた。彼らはなんと自分の目指す地域の人々であった。「ナホルの子ラバン」ナホルはラバンの祖父。ヤコブの祖父アブラハムの兄弟。→11:29,24:15

ラバンはリベカの兄→24:29 この地ではラバンの名がよく知られていたようである。

[6] ラバンの安否を問うヤコブに羊飼いたちは「元気です」と答え、さらに「ほら、娘のラケルが羊を連れてやって来ます」と教える。リベカの場合と同様ラケルも井戸で運命の出会いをすることとなった。

[7] 「ご覧なさい。日はまだ高いし、群れを集める時間でもありません。羊に水を飲ませて、草を食べさせに戻ってはどうですか」羊に草を食べさせる貴重な時間を無駄にすべきではないとの意見であろうが、実際はラケルのために人払いをしたかったのであろう。

[8] 羊飼いたちはそうはできない理由を説明する。

[9] 「ヤコブがまだ彼らと話しているとき、ラケルが父の羊の群れを連れてやって来た。彼女は羊を飼っていたのである」ラバンの家では男手が足らなかったのであろう。

[10-11] 「ヤコブは母の兄ラバンの娘ラケルと、母の兄ラバンの羊の群れを見ると、すぐ近寄って行って、井戸の口の上の石を転がし、母の兄ラバンの羊の群れに水を飲ませた。そしてヤコブはラケルに口づけし、声をあげて泣いた」

ヤコブはラケルを見て一目ぼれのような感情を抱いたのであろうか。彼は張り切って重い石を一人で転がし、羊の群れに水を飲ませる。ほかの羊飼いたちはあつけにとられて見ていたのであろう。「口づけ」は家族や親しい者の間で行われる愛情の表現。母の

兄の娘という事実とラケルへの好ましい思いから、彼の感情は爆発して、このような行動となったのであろう。

[12]「ヤコブはラケルに、自分は彼女の父の甥であり、リベカの子であることを告げた。彼女は走って行って、父にそのことを告げた」

ラケルは叔母リベカの結婚のいきさつについてはよく聞いて知っていたに違いない。それで彼女は走って行って、父にそのことを告げた。

[13] ラケルの父ラバンはそのことを聞くと、すぐにヤコブを迎えに走って行き、彼を抱きしめて口づけした。これは初めて会う妹の子に対する感動のゆえであっただろう。彼はヤコブを自分の家に連れて帰り、ヤコブはラバンにここに来るまでの事の次第をすべて話した。

[14]「あなたは本当に私の骨肉だ」これは親類であること、ヤコブの説明を信じたことの表明。こうしてヤコブは彼のところに一か月滞在した。

[15]「ラバンはヤコブに言った。『あなたが私の親類だからといって、ただで私に仕えることもないだろう。どういう報酬が欲しいのか、言ってもらいたい』」

一か月の滞在のうちに働き手としてのヤコブの能力をラバンは高く評価するようになったようである。ラバンはヤコブに報酬を払うことによって、うやむやではなくきちんとした関係を確立して、彼の労力を得ようとしたのであろう。

[16-18] ラバンの二人の娘、姉の名は「レア」雌牛、妹の名は「ラケル」雌羊の意。「レアの目は弱々しかった」これは外見的なものであっただろう。デリケートで優しかったという解釈もある。「ラケルは姿も美しく、顔だちも美しかった」レアと比べてそうであったということ。「ヤコブはラケルを愛していた。それで、『私はあなたの下の子ラケルのために、七年間あなたにお仕えします』と言った」(18)ラバンの問いに対するヤコブの答えはラケルであった。ラバンも当然そのことを予期していたであろう。持参金も何も持たないヤコブにとって、何年かの労働は当然支払うべき対価であっただろう。しかし七年間という期間はその労働の結ぶ実を考えると十分すぎるほどと思われる。

[19]「ラバンは、『娘を他人にやるよりは、あなたにやるほうがよい。私のところにとどまっていなさい』と言った」

この言い方はラバンの性格をよく示している。「娘」と言ってラケルとは言っていない。「私のところにとどまっていなさい」と言って七年間という期間を確約せず、意識的にあいまいな答えをしている。

[20-21]「ヤコブはラケルのために七年間仕えた。ヤコブは彼女を愛していたので、それもほんの数日のように思われた。ヤコブはラバンに言った。『私の妻をください。約束の日々も満ちたのですから、彼女のところに入りたいのです。』」

ヤコブにとってこの七年はラケルのためであると完全に信じていた。彼女に対する愛のゆえにそれはほんの数日のように思われた。ヤコブのこのラケルに対する愛こそラバンにとって自分の利益のために十分に利用できるものであった。そして七年間はあつと

いう間に過ぎた。七年が過ぎてもラバンは何も言い出さなかったようである。それでヤコブは約束の実行をラバンに求めた。彼のことばにはラバンの態度への不満と疑いが表れている。「彼女のところに入りたい」結婚したいの意。

[22-24]「そこでラバンは、その土地の人たちを皆集めて祝宴を催した。夕方になって、ラバンは娘のレアをヤコブのところ連れて行ったので、ヤコブは彼女のところに入った。ラバンはまた、娘のレアに、自分の女奴隷ジルパを彼女の女奴隷として与えた」

「祝宴」とは結婚披露宴のことで、結婚を公式のものと認めさせる意義がある。夕方になってラバンはラケルではなく上の娘レアをヤコブのところ連れて行った。これは許されない裏切り行為である。ここでラバンの本領が発揮されている。人を欺いたヤコブが今度はラバンによって欺かれている。

[25]「朝になってみるとそれはレアであった」なぜヤコブはそれを見破れなかったのかと思うが、当時は夫婦関係を持つまでは花嫁はベールをかぶっている習慣があり、今日と違って夜は照明もなく暗かったということもあっただろう。レアも何も言わなかったということは、結果的にはラバンの欺きに加わったということであり、これもヤコブの不快感に拍車をかけたと思われる。しかし、一夜を過ごしたことに於いてヤコブはレアと法的なつながりを持ち、もはやヤコブの自由にはならない。

「……なぜ、私をだましたのですか」ヤコブは激しい怒りに震えて言ったことであろう。しかし、ヤコブ自身も過去にエサウを、そして父をだましたことの記憶が一気に思い出されてきたのではないだろうか。人をだました者が今度はだまされる側に回る。これはヤコブに対する神のさばきであった。人は悪を行って、あるいは罪を犯して、うまく人生の最後まで走り抜けるということはできない。必ず人生のどこかで報いを受ける。仮に最後までうまくいったとしても、神の永遠のさばきが待っている。人はごまかせても神はごまかせない。→箴言24:12,マタイ16:27　しかし、このようなラバンとヤコブのだましだまされという罪深い人間の出来事を通してなおも摂理のうちに神のみこころがなされていくのである。

[26-27]「ラバンは答えた。『われわれのところでは、上の娘より先に下の娘を嫁がせるようなことはしないのだ。この婚礼の一週間を終えなさい。そうすれば、あの娘もあなたにあげよう。その代わり、あなたはもう七年間、私に仕えなければならない。』」

確かにその地方ではそうであったのかもしれないが、それならそのことをもっと早く明らかにしておくべきで、彼の欺きを正当化することはできない。今日の個所ではレアの意思は明らかにされていないが、ヤコブがレアを好まなくてもレアはヤコブを愛していたと思われる。でなければ、父ラバンがヤコブのところへ行くように言っても行かなかっただろう。そういったこともラバンはちゃんと知っていたのであろう。ラバンは今までの七年間はレアのためであったのだから、ラケルを妻とするためにはさらにもう七年間を私の下で働かなければならないと言う。これはもう詐欺師顔負けのラバンの手管である。

[28-29]「そこで、ヤコブはそのようにした。すなわち、その婚礼の一週間を終えた。それでラバンは、その娘ラケルを彼に妻として与えた。ラバンは娘ラケルに、自分の女奴隷ビルハを彼女の女奴隷として与えた」

七年間の労役の前にラケルを与えたのはヤコブが同意しやすくするためであり、それなしにもう七年待たすとヤコブが逃げ出すと思ったのかもしれない。そしてラケルの女奴隷としてビルハも加えられた。

姉と妹にそれぞれ一人ずつの女奴隷である。

[30]「ヤコブはこうして、ラケルのところにも入った。ヤコブは、レアよりもラケルを愛していた。それで、もう七年間ラバンに仕えた」

ラバンの欺きとヤコブのラケルへの愛の結果がこの重婚となる。レビ記18:18には姉妹との重婚が禁じられているが、これは後のモーセの時代に与えられた律法である。しかし、ヤコブの時代にはそのような決まりはなかったといっても決して正当化されることではない。一夫一妻制こそ神の定めておられる秩序なのである。→創世記2:24 この重婚の報いをもやがてヤコブは受けなければならないこととなる。

ラバンもヤコブも全く人間的には問題のある人物であり、弱さや罪がはっきり表れているが、なおもそのような彼らを通して神の摂理の御手が働き、救い主イエス・キリストに至る神のご計画が進展していく。人間は常に何らかの問題があり、欠けがあり、罪を犯し、失敗をし、弱さをさらけ出すが、神はそのような人間を用いてご自身のみこころを完成させることのできるお方である。

私たちも、今この地上に、この日本に生かされているということは、そこに何か私たちを通して神のみこころがなされるためであることを覚えたい。私たちは自分自身のことだけに終始して生きるのではなく、聖書のみことばを通して神のみこころを知り、それを行っていくこと、また神を信じる者としてそれにふさわしい生き方をしていくことが大切である。

→エペソ2:1~10,ピリピ1:27~28